

さといもの種芋分割による増殖法について

1. 試験のねらい

サトイモの優良品種，系統の増殖と従来廃棄していた親芋の有効利用をはかるため，種芋の種類と分割程度及び催芽処理が生育・収量・増殖率に及ぼす影響を検討した。

2. 試験方法

品種は女早生を用い，種芋の種類は親芋（160g），子芋，孫芋（80g）とし，分割程度は無分割，1/2，1/4，1/8，1/16（親芋のみ）を設け，催芽の有無を組合せて試験を行った。種芋の植付時期は，無催芽区が3月31日，催芽区が5月15日で，畝幅100cm，株間40cmの1条植えとした。施肥量は3要素ともa当たり成分量で2kg施用した。マルチ（透明ポリ）は両区とも3月31日に畝幅70cmに行い，培土は6月25日のマルチ除去直後に行い，収穫は11月13日に行った。試験規模は1区10株2区制とした。

3. 試験結果及び考察

萌芽期は，催芽区がやや早く，芋の種類では親芋，子芋区がやや早く，孫芋区はやや遅れた。萌芽株率は，無分割区が100%と高かったが，分割片が小さくなるに従い低くなり，親芋の1/16，子，孫芋の1/8分割区は30%以下であった。

生育は，催芽区がやや良く，芋の種類では差が少なかったが，種芋個体（分割片）が小さくなるに従い，草丈が低く，葉の大きさも小さくなった。

芋数は，無催芽区がやや多かったが，芋の種類では差が少なく，種芋個体の大きさの影響が大きく，種芋個体の大きい区が芋数は多かった。

芋重も芋数と同様に無催芽区がやや多く，芋の種類では親芋区より，子・孫芋区がやや多収の傾向を示したが，種芋個体の大きさの影響が大で，種芋個体の大きい方が多収であった。

芋の増殖率は，無催芽区がやや高く，芋の種類では孫芋区がやや高い傾向を示した。種芋個体の大きさでは親・子・孫芋区とも1/8分割区が高かった。

4. 成果の要約

種芋の分割による増殖は，種芋個体の大きさを小さくすることにより高まるが，株の萌芽率や目標とする1芋重を考慮すると安全な分割程度は親芋で1/8，子・孫芋で1/4であると考えられた。なお，種芋個体の大きさを20g以下の小片とする場合は催芽後植え付けが望ましい。

（担当者 野菜部 大村 栄）

